

第1回噴火湾ホタテガイ情報(2013年) 発行日：平成25年2月22日

函館水産試験場・栽培水産試験場・釧路水産試験場、胆振・渡島北部・渡島中部地区水産技術普及指導所

今年の採苗予測：春のブルーミングが遅れており、生殖巣発達初期である2月の餌量が少ないため(クロロフィルa濃度：1.5 $\mu\text{g/L}$)、今年の種苗密度は低くなる可能性があります(予測種苗密度：800個/100g、信頼区間：200~3,000個/100g)。

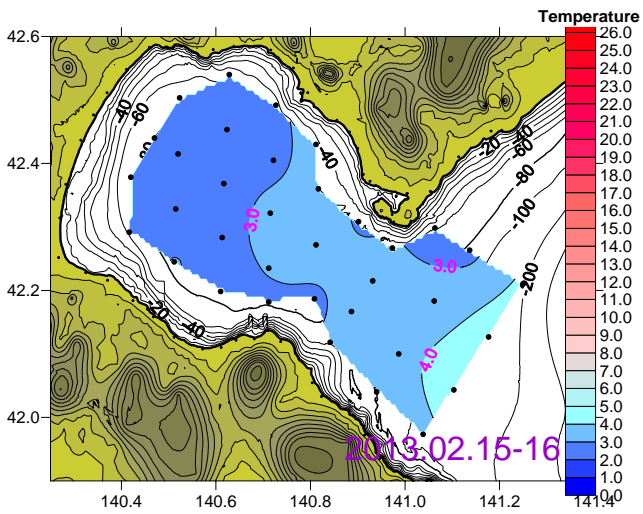


図1. 噴火湾水深10mの水温分布(°C) (2/15-2/16) °C

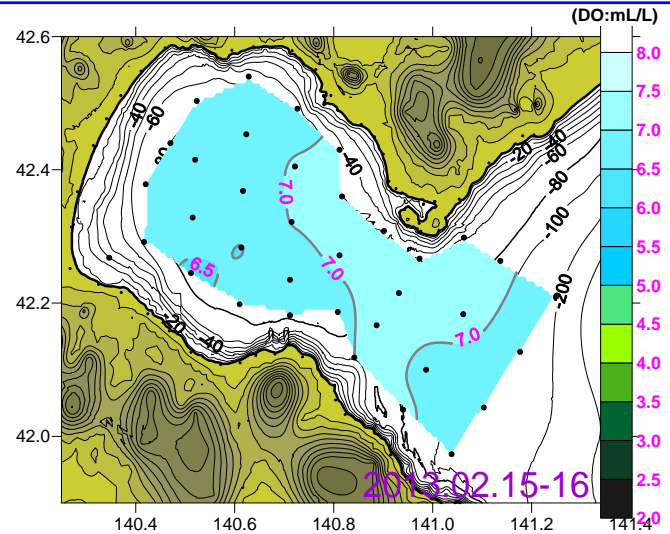


図3. 噴火湾海底上5mの溶存酸素濃度(mL/L) (2/15-2/16)

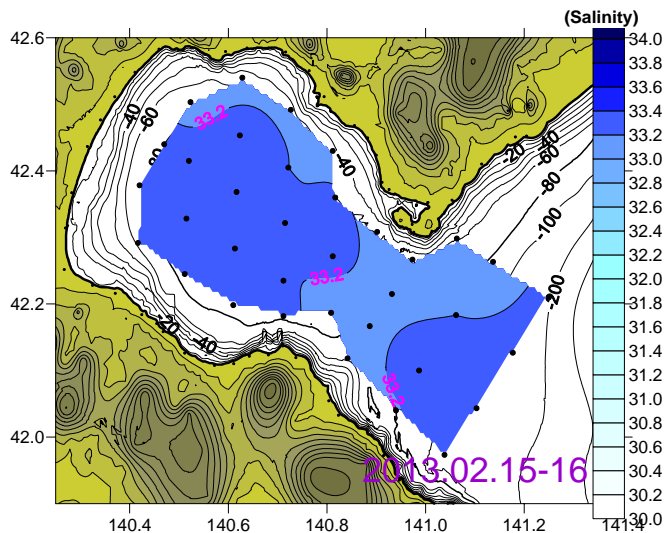


図2. 噴火湾水深10mの塩分分布(2/15-2/16)

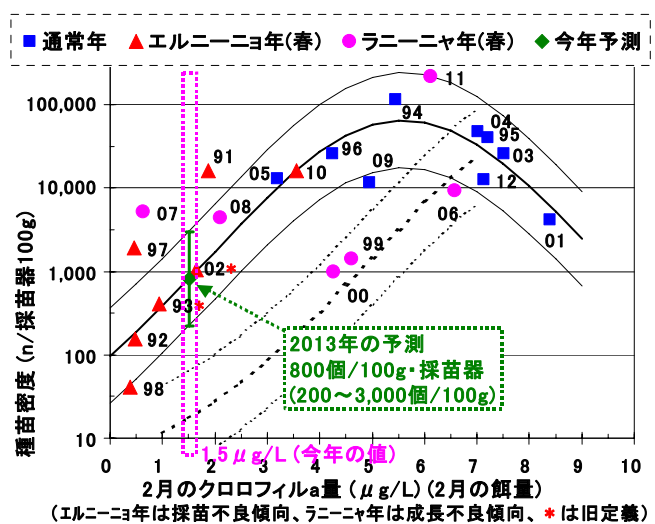


図4. 2月の餌の量と種苗密度の関係(数字は西暦の下2桁)

【概要】 2月15~16日に、釧路水産試験場の北辰丸により、噴火湾の環境調査を行いました。胆振側湾口の表層から水温3~4°Cの湾外水が湾内(水温2~3°C)に流入しています(図1)。胆振側で塩分がやや低いことから(図2)、沿岸親潮が流入していると考えられます。海底から5mの溶存酸素濃度は全域で6.5~7.0mL/Lと高く(図3)、昨年秋に形成されていた貧酸素状態は完全に解消されたと言えます(貧酸素の基準は溶存酸素2~3mL/L以下)。

過去の調査結果から、各年の採苗状況について次の3つの事がわかっています。①生殖巣発達前期の2月の餌の量が種苗密度(採苗器100g当たりの種苗数)に大きな影響を与える。②採苗不良は春にエルニョが発生している年に起こることが多い。③母貝の成長不良年は採苗密度が2月の餌の量からの期待値よりも低くなる、また、成長不良年は春にラニーニャが発生中の年に起こることが多い。今年春(3~5月)に、エルニョやラニーニャが発生する見込みはありません。

今年2月の餌の量(クロロフィルa濃度)は1.5 $\mu\text{g/L}$ と低い濃度で、今年の予測種苗密度は800個/100g(90%信頼区間：200~3,000個/100g)と計算されました(図4)。また、2月の八雲の観測定点での貝柱重量は平均12.3g(SD=2.0)で成長不良年の基準12.5gより低く、今年成長不良年とも言えそうです。この成長不良が採苗に影響した場合、種苗密度はさらに低くなる可能性があります。ただし、貝柱重量は1月の平均8.8g(SD=2.1)から急激に回復しています。過去の2月の餌量が低い年の種苗密度の値は2.5万個(1991)、500個(1993)、1,500個(2002)、6,000個(2007)、4,600個(2008)で、概ね低い値ですが、1991年のように高い年もあります。ここに載せた採苗予測は、過去のデータを解析したもので、1991年のように大きく外れる年もあります。実際の採苗準備や種苗の手配等は、各養殖漁業者の経営責任で行ってください。(連絡先：函館水産試験場 馬場・渡野邊・金森・佐藤 TEL:0138-57-6074)

この情報は函館水試のホームページからもご覧いただけます。 <http://www.fishexp.hro.or.jp/exp/hakodate/>